

# 四国遍路縁起と西国巡礼縁起

寺内 浩

## はじめに

近世における四国遍路関係史料の一つに、『奉弘法大師御伝記』、『弘法大師空海根本縁起』、『四国辺路御開基弘法大師縁起完』など名称はさまざまだが、前半に空海の伝記、後半に四国遍路の由来や功德を記した史料がある。これらの史料の中には、説経『荊萱』の「高野の巻」と同じく、空海の父を「藤新太夫」、母を「あこや」などとするものがあり、これまでも研究者の注目を集めている<sup>①</sup>。

これらの史料について詳しく考察されたのが武田和昭氏である<sup>②</sup>。武田和昭氏は『弘法大師空海根本縁起』を中心に他のものもあわせて考察され、『弘法大師空海根本縁起』の作成には弥谷寺や白方屏風ヶ浦周辺に住した念仏聖が関わっていたこと、四国遍路と高野山や弘法大師との関係を明確にし四国遍路の功德を説いて人々に勧めることが作成目的であったこと、内容面では西国巡礼縁起の影響を大いに受けていることなどを明らかにされた。基本的にはいずれも首肯できるも

のだが、いくつかの点でさらに議論を深めることができるように思われる。以下では、これらの史料の後半、すなわち四国遍路の由来や功德について記した部分（以下ではこの部分を四国遍路縁起と呼ぶことにする）に焦点をあて、西国巡礼縁起との関係と多度数巡拝の問題について論じていきたい。

本論に入る前に、武田和昭氏に従いこれらの史料を次の三つの系統に分類しておく<sup>③</sup>。

A 『奉弘法大師御伝記』

B 『弘法大師空海根本縁起』

C 『四国辺路御開基弘法大師縁起完』

Aは善通寺所蔵の元禄元年（一六八八）の版本で、巻末に「元禄元年土州一ノ宮」とある<sup>④</sup>。嘉永七年（一八五四）書写の『弘法大師御伝記』（個人蔵）、高木啓夫氏により紹介された嘉永二年書写の『弘法大師御伝記』、文久四年（一八六四）書写の『南無弘法大師縁起』<sup>⑤</sup>はいずれもAを原本とするものである。

Bは武田和昭氏によって紹介された元禄一二年（一六九九）

の写本で、巻末に「元禄十二年正月廿八日 高野山千手院谷西方院内 真教書之」とある。

Cは喜代吉栄徳氏によって紹介された元文元年（一七三〇）の版本で、末尾に「元文元丙辰」とある。同版のものが、鎌田共済会郷土博物館、香川県立図書館、徳島県立図書館にある。

## 一 西国巡礼縁起

西国巡礼、すなわち西国三十三カ所巡礼は平安時代末期に成立した巡礼である。西国巡礼は観音信仰に基づく巡礼で、札所の本尊はいずれも観音菩薩である。当初の巡礼者は僧侶や修験者が中心であったが、一五世紀頃から一般人も巡礼に出るようになり、そのころからさまざまな縁起が作られる。縁起の内容は諸本によりやや異なるが概略は以下の通りである。

養老年中に長谷寺の徳道上人が頓死して冥界に至り、閻魔王から三十三の観音霊場を教えられ、三十三の印（諸本ではこの他に縁起、日記、起請文）を与えられる。蘇生した徳道上人はそれらの印を中山寺に納める。その後永観年中に仏眼上人（熊野権現の化身）を戒師として出家した花山上皇はこのことを聞いて中山寺に使を送り、それらの印を三十三所に納め、仏眼上人らと巡礼に出る。熊野に帰った仏眼上人と花

山上皇は熊野で再会し、上人から巡礼の功德が説かれる。

武田和昭氏は、空海の両親が子供の誕生を願って参籠したのが中山寺（西国二四番札所）であること、夜泣きが激しいため捨てられた空海を拾ったのが徳道上人であること、空海が香川氏や衛門三郎に閻魔宮の秘密の御判を与えたこととあることなどから、Bが西国巡礼縁起の影響を受けていることを指摘されたのだが、詳細に検討するとさらにいくつもの類似点を見いだすことができる。とりわけ、後半の弘法大師と香川氏、四国遍路の功德の部分は西国巡礼縁起を下敷きとして作られていることが判明する。

弘法大師と香川氏の話は、Aはきわめて簡略だが、BCには詳しく述べられている。BとCはだいたい同内容なので、ここではBを掲げておく。

(ア) 扱又四国に八十八ヶ所を建立有て、始て辺路を三十三度、中辺路を七度させ給、中にも讃岐国香川氏と申大明有けるか、子を持ち万の人の軍兵を持ち、弓箭とると雖も誠に此世者一時の栄花也、扱後生を願わんとおもひ、弘法大師を御師匠に頼み奉、永禄二年三月五日に花の泪を引かへしも与結ゆひを切り給、其時の供以上百廿十人也、香川殿、大師に向かいての給ハ、如何に弘法皆の御布施には、七珍万宝か国の所領か弘法大師御届たるへし、弘法聞召、久しからぬ後せならは七珍万宝も国の所領も無益也、唯一切の衆生成仏有へき様二と仰ける、香

川手大俗の身として、かひがに衆生を成仏なすへからす、弘法答云、されは四国に三世諸仏の御宝殿八十八ヶ所を建立し、辺路を進め候得とて、日記、縁起、えんまわうぐうの秘密の御はんを請取り、中辺路を廿一度成就し給、其友によつて香川殿臨終の刻は、八十八ヶ所の諸神諸仏、悉観音勢し蓮台を傾け、廿五の菩薩はをんかくをなし給いて極楽浄土へ来迎有るとみへて有り、

後生を願う香川氏が弘法大師を師として出家する。香川氏は布施を届けようとするが、弘法大師は布施は無益であり、衆生の成仏を願うとする。私には衆生を成仏させることはできないとする香川氏に、弘法大師は八十八ヶ所を建立し、遍路を勧めよという。香川氏は日記、縁起、閻魔宮の秘密の御判を受け取り、中遍路を二度する。香川氏臨終の際には八十八ヶ所の諸神仏などが来、極楽浄土へ迎える。

こうした弘法大師と香川氏の話は、西国巡礼縁起に見える仏眼上人と花山上皇のやりとりと全く同じである。西国巡礼縁起でも、後生を願って出家した花山上皇が戒師の仏眼上人に布施を申し出るのだが、仏眼上人はそれを無益として断り、衆生の成仏を求める。その方法を問う花山上皇に対して、仏眼上人は三十三所巡礼を人々に勧めよと答える。

語句も酷似している。上記(ア)によると、香川氏の申し出た布施は「七珍万宝か国の所領」、弘法大師の断りと求めの文句は「七珍万宝も国の所領も無益也」、「一切の衆生成仏有へ

き様二」である。一方、西国巡礼縁起は、慶応義塾大学図書館蔵の『三拾三所観音縁起』、松尾寺蔵の『西国霊場縁起』を例にとると、花山上皇が申し出た布施は「七珍まんほうか、国の所帯か」、仏眼の返答は「七珍万宝も国の所帯も無やく也」、「末世乃衆生の成仏あるへき御布施を給らん」である。なお、香川氏が受け取った「日記」、「縁起」、「えんまわうぐうの秘密の御はん」も、西国巡礼縁起の諸本では閻魔王が徳道上人に与えたとされるものである。

このように弘法大師と香川氏の物語は西国巡礼縁起をベースに作られたものであることは明らかである。違いは弘法大師が閻魔王と仏眼上人の両方を兼ねていることである。つまり、西国巡礼縁起は、閻魔王が徳道上人を通して三十三ヶ所を創始する話と花山上皇が仏眼上人の教示により三十三ヶ所を再発見する話の二段構成になっているのだが、四国遍路縁起ではこの二つの話が一本化され、閻魔王と仏眼上人が弘法大師、花山上皇が香川氏に作り替えられているのである。

次に、遍路の功德について見ていくことにしたい。功德についても、Aは簡略なのでここではBを掲げておく。

(イ) 故に辺路を一度廻り、供養をなしたる友は高野山へ三十三度の参詣にあたる、辺路を春る人に道能教、又は一夜の宿を借たる友は三毒内外のわへ不浄を遁れず、命長遠にして思事叶なり、又は五逆十悪の友成共、諸神諸仏の極楽浄土得趣へし、辺路を一度廻り供養したる友

も、地獄に落つる物ならば、炎魔帝釈九精進も友に地獄におとさんとの御誓願也、辺路を常に念ずる友は、則都卒婆の内院上品上生九ぼんの蓮台を傾、迎ひ取り給へとの弘法大師の御誓願無疑、此縁起を一度聴聞すれば高野山江一度の参詣にあたる也、これを聴聞する輩は毎日南無大師遍照金剛と唱れば、現世あんおん後生善三世の師、七世の父母迄も成仏する事無疑、

ここには遍路をする功德、遍路者に道を教え宿を貸す功德、遍路を念ずる功德、縁起を聴聞する功德が述べられているが、これらはいずれも西国巡礼縁起にみえるものである。(イ)は最初に一度の遍路が高野山三十三度の参詣にあたるとするが、西国巡礼縁起では一度の巡礼が熊野参詣三十三度にまさるとしている。『雑濫』の「三十三所巡礼縁起之文」には、熊野三十三度の参詣よりも巡礼一度の功德の方が大きいとあり、慶応義塾大学図書館蔵『三拾三所観音縁起』でも、熊野を三十三度参詣した者よりも巡礼を一度した者を私は礼拝すると仏眼が述べている。また、一度遍路したものが地獄に墮ちる時は閻魔なども共に落ちることについては、慶応義塾大学図書館蔵『三拾三所観音縁起』、松尾寺蔵『西国霊場縁起』に、一度巡礼した者が地獄に墮ちる時は十王や俱生神も共に落ちるとある。

遍路者に道を教え宿を貸す功德については、慶応義塾大学図書館蔵『三拾三所観音縁起』、松尾寺蔵『西国霊場縁起』

に、巡礼者に一夜の宿を貸したものは三世の諸仏の供養よりもすぐれているとあり、『中山寺縁起』では、巡礼者に道を教え、道を直したものは利益を得、路傍の者が「資飯宿茶」を喜捨すると現来世に善果を得るとしている。

遍路を念ずる功德については、巡礼を念ずるとはしていないが、慶応義塾大学図書館蔵『三拾三所観音縁起』に観音を朝夕念ずる者は三世諸仏利益にかなうとある。

縁起聴聞の功德については、大東急記念文庫蔵『西国巡礼縁起』に、縁起を一度聴聞すれば熊野一度参詣に勝り、五逆・十悪の者でも六親眷属七世父母まで成仏できるとある。

この他、Cには一度遍路した者は罪業消滅、天上の果を得るとあるが、『壺囊抄』の「三十三所ノ観音事」には、一度巡礼した者は十悪五逆をなしても速やかに罪が消滅し、『雑濫』の「三十三所巡礼縁起之文」には、一度巡礼した者は罪業消滅、現世安穩・後生善処とある。

以上のように、四国遍路縁起の弘法大師と香川氏、四国遍路の功德の部分は西国巡礼縁起をもとにして作られたものである。そして、熊野権現の化身である仏眼上人と閻魔王が弘法大師に、熊野三十三度参詣が高野山三十三度参詣に書き換えられている。これは、西国巡礼は熊野信仰の影響が強いのに対し、四国遍路は弘法大師信仰を基盤としていることによるものである。

## 二 多度数巡拝者

本章では、西国巡礼縁起にはみえない四国遍路縁起独自の記述についてみていくことにしたい。

弘法大師と香川氏のやりとりは先述したが、(ア)によると香川氏は最後に「極楽浄土へ来迎有るとみへて有り」とある。つまり、四国遍路縁起では香川氏は遍路の功德により西方極楽浄土に往生できたとするのだが、西国巡礼縁起には巡礼をした花山上皇のその後のことは見えず、香川氏の極楽往生の記述は四国遍路縁起独自のものである。また、Cには四国遍路縁起を一度聴聞し、毎日南無阿弥陀仏と唱えれば現世安穩、後生善処とあり、この南無阿弥陀仏の唱名も西国巡礼縁起にはみえないものである。四国遍路縁起にみえるこうした阿弥陀信仰・念仏信仰については、武田和昭氏が四国遍路縁起には念仏聖が関わっていたことによるものとされているが、支持すべき見解であろう。

次に注目したいのが、四国遍路縁起では弘法大師や香川氏が何度も遍路をしていること、すなわち多度数巡拝をしていることである。弘法大師は、Aでは大遍路七度、中遍路二一度、小遍路三三度、Cでは「三十三度或ハ廿一度又ハ七度の修行ス」とあり、香川氏も二一度の遍路を行っている。衛門三郎も弘法大師に会うために二一度、さらに逆打ちで七度の四国遍路をしたとある。西国巡礼縁起では、花山上皇の巡礼

は一度あるいは二度であり、こうした多度数巡拝は四国遍路縁起独自のものである。

では、なぜ四国遍路縁起にはこうした多度数巡拝のことがみえるのであろうか。結論を先にいえば、それは当時そうした多度数巡拝者が多くいたことによるものであろう。

一七世紀前後の史料には以下のような四国遍路多度数巡拝者がみえている。

### (1) 道休

真念『四国辺路道指南』の八五番八栗寺項に「此禅門ながく大師に帰命し奉り、はき物せずしてじゅんれいする事十二度、すべて二十七度の遍路功なりて、つるに身まかる」、高松市庵治町にある貞享元年（一六八四）の道休禅師墓にも「四国辺路廿七遍」とあり、道休は四国遍路を二七回、そのうち一二回は裸足で遍路をした。

### (2) 真念

真念『四国遍礼功德記』の中宜の跋辭に、真念は「大師につかへ奉らんとふかく誓ひ、遍礼せる事二十余度に及べり」、また寂本『四国遍礼霊場記』の序文に、真念は「抖擻之桑門也、四国遍礼者十数回」とあり、真念は一〇余回あるいは二〇余回の遍路を行っていた。

### (3) 天正一九年四国遍路七度成就塔

高知県中土佐町の自然石板碑に「四国中辺路□七度成就也」「南無大師遍照金剛」「為美作国住円心逆修也」「天正

十九年辛卯年」と書かれてある。美作国の円心が天正一九年（二五九二）に七回目の遍路をした時に建てたものであろう。

(4) 明暦二年四国遍路七度成就塔

高知県宿毛市荒瀬に行海が施主となって建てた明暦二年（二五六六）の四国遍路七度成就塔（石塔）があり、碑文には「明暦二年 四国仲辺路行願弟七度成就 三月廿一日 施主 行海」とある。

(5) 延宝八年四国遍路三十六度成就塔

三九番札所延光寺に高林玄秀が施主となって建てた延宝八年（一六八〇）の四国遍路三十六度成就塔（石塔）があり、碑文には「四国辺路三拾六度往行成就依其、延宝八庚申年」「南無大師遍照金剛施主高林玄秀」「謹奉建立石□□□供養者也、十二月廿一日」とある。

(6) 貞享五年四国遍路七度成就塔

同じく三九番札所延光寺にある貞享五年（一六八八）の石塔で、碑文には「奉建立石佛者四国辺路七度成就伸供養所也」「南無大師遍照金剛」「土州幡多郡宿毛住」「貞享五戊辰年十一月廿一日」「水室妙寿」とある。

(7) 正徳元年四国遍路二一度成就塔

一〇番札所切幡寺の参道に「奉供養四国遍路二十一度為無上菩提」と刻まれた墓がある。願主は「美馬郡半田村願主春□」である。

このように一七世紀前後には四国を何度も巡る者たちが多

くおり、こうした多度数巡拝者の存在が四国遍路縁起に反映されたのであろう。では、多度数巡拝者とはどのような者たちなのであろうか。

さて、このころの多度数巡拝者としてすぐに想起されるのは西国巡礼三十三度行者（以下では単に三十三度行者とする）であろう。三十三度行者とは、西国観音霊場三十三ヶ所を三十三度巡る修行者のことで、熊野那智の行者が有名である<sup>(1)</sup>。以下では、多度数巡拝者の問題を考えるため、三十三度行者および熊野と高野山の勧進聖についてみていくことにしたい。

一五世紀になると社会の混乱により寺社の多くは荘園等からの収入が減少し、造営や修造費用の調達が困難となる。そうしたなかで寺社の造営・修造費用を確保するために活動したのが勧進聖たちである。熊野の場合は、従来は造営・修造費用は造営料国や段銭・棟別銭などでまかなわれていたのだが、室町幕府権力の衰退によりそれらはほとんど失われてしまい、一五世紀後半以降は勧進聖たちの勧進活動に頼らざるをえなくなる。こうした勧進聖たちを組織化し、造営・修造を担当するところを本願（穀屋）という。熊野那智には七つの本願があり、その配下に多くの勧進聖たち、具体的には山伏や熊野比丘尼などがいて、那智を信仰面・経済面から支えていた。那智本願の一つ那智阿弥のもとにいた三十三度行者集団も同様であり、熊野信仰や西国観音霊場（那智は西国一

番札所)の信仰を広めながら、勧進活動にも従事していたと考えられている。なお、三十三度行者の成立過程には不明の点が多いが、一六世紀には存在していた可能性が高い<sup>①</sup>。

しかし、江戸時代に入ると幕府の方針により勧進聖を含む遊行僧の取り締まりがきびしくなり、一方で寺社への公的な扶助も復活したため、本願およびその配下にあった勧進聖たちの活動は急速に衰えていく。熊野では、熊野信仰の普及に大きな役割をはたした参詣曼荼羅が作られなくなり、また熊野比丘尼も芸能者としての性格を強めていく。こうしたなかで熊野那智の本願の下にあった三十三度行者集団も那智を離れ、河内国仏眼寺に本拠を移して、花山院家との関係を結ぶなど近世的な組織を整えていくのである。

熊野の勧進聖と三十三度行者についてみてきたが、高野山はどうであろうか。中世高野山における堂舎の造営・修造といえは高野聖による勧進活動が有名だが<sup>②</sup>、近年の研究によると高野聖ではなく山内の衆徒(学侶)あるいは衆徒に近い勧進上人が幕府・朝廷といった公権力や寺領莊園を背景に造営・修造活動の主導権を握っていたらしい。しかし、他寺社と同様一五世紀後半になると衆徒と行人の対立もあって高野山でも勧進聖、とりわけ十穀聖と呼ばれる聖たちが造営・修造の中心となる。勧進聖たちは堂舎ごとに本願所を形成し、弘法大師信仰を利用しながら盛んに勧進活動を展開した。しかし、江戸時代に入ると行人層が造営・修造活動を掌握し、

勧進聖の活動は終息に向かう。こうした動きは他の寺社では一七世紀の中頃からおきるのだが、高野山ではそれよりも半世紀近く前の慶長年間から本願所の衰退が始まったようである<sup>③</sup>。

熊野と高野山の勧進聖について簡単に述べてきたが、管見の限りでは江戸時代以前の高野山の勧進組織のなかに熊野那智の三十三度行者のような存在を見いだすことはできなかった。また、三十三度行者集団は江戸時代になると河内国仏眼寺を本拠として近世的な組織を再構築するが、江戸時代の四国遍路多度教巡拝者にはそうした組織や集団はみられないので、高野山の特定の本願所の下に四国遍路多度教巡拝者の組織・集団があった可能性は低いように思われる。また、江戸時代になると本願所が衰退し、勧進聖の活動も終息したとすると、少なくとも江戸時代になってからの多度教巡拝者は、高野山から離れ個別に存在していた者が多かったのではないだろうか。先にみた多度教巡拝者のうち真念は大坂寺嶋、圓心は美作国、そして史料(7)の「願主春□」も美馬郡半田村の住人であり、居住地はいずれも高野山の外であることはこうした推定を裏付けていよう。さらに、道休は「此禪門ながく大師に帰命し奉り、はき物せずしてじゅんれいする事十二度、すべて二十七度の遍路功なりて」、真念は「大師につかへ奉らんとふかく誓ひ、遍礼せる事二十余度に及べり」とあるように、彼らは弘法大師への深い帰依によって遍路を行っ

ており、そこには勸進的要素はみられない。つまり、道休や真念たちは高野山に属した旧来の勸進聖とは異なるタイプの「聖」である。このように江戸時代の四国遍路多度数巡拝者は高野山から離れ、弘法大師信仰によって遍路を重ねていた者が多く、かつての高野山勸進聖とは性格の違うものであったと考えられる。<sup>19)</sup>

ところで、なぜ四国遍路多度数巡拝者は何度にもわたって四国を巡るのであるのか。西国三十三度行者については、参詣回数が多いほど功德も大きいとされる熊野詣の影響があったらしい。つまり、西国巡礼と熊野詣とは密接な関係にあるので、多度数の参詣を理想とする熊野詣の影響により西国三十三度行者が生まれたようである。なお、三三三という数字については、観音の化身数三三三によるもの、山伏の三三度入峰修行が巡礼修行に転化したもの、三三度の熊野詣をもって満行とする考えによるものなどの説がある。<sup>20)</sup>

四国遍路が熊野信仰の影響を強く受けていることはこれまでも指摘されているので、あるいは西国三十三度行者と同様に考えることもできるが、詳しくは不明とせざるをえない。回数も四国遍路は七、二一、三三とさまざまであり、あまり統一性はみられない。各数字のうち、七と二一は古来の仏教の聖数七にちなむものであろうが、二一は空海の命日二一日とも関連しよう。<sup>21)</sup>三三は、四国遍路が本来僧や修験者の修行であったことからすれば、山伏の三三度入峰修行による可能

性が強いが、西国三十三度行者の例にならったのかもしれない。<sup>22)</sup>

四国遍路多度数巡拝者は一八世紀以降も多く見られる。明治時代以降も生涯に二八〇度の巡拝をした中務茂兵衛のように多度数巡拝者は少なくはない。一方、一六世紀以前のことは中世の四国遍路関係史料がきわめて少ないこともあってはつきりしたことはわからない。西国三十三度行者については「永正三年卯月廿八日 西国三十参度順礼」などの一六世紀の納札がいくつか残されていて一六世紀初期には存在したらしい。<sup>23)</sup>ただ、永禄元年（一五六七）の「石手寺刻板」にみえる衛門三郎伝説は一六世紀の四国遍路多度数巡拝者を考える際の一つの材料となるかもしれない。なぜなら、いずれの四国遍路縁起にも衛門三郎が二度巡拝したとあるのに、「石手寺刻板」の衛門三郎伝説には「剃髪捨家、順四国辺路」としかないからである。そこで四国遍路縁起と「石手寺刻板」の衛門三郎伝説にみえる数字を調べると、四国遍路縁起では衛門三郎の子が八人、衛門三郎の遍路回数が二一度、河野家に生まれ変わるのが三年後、石の大きさが一寸八分となつている。一方、「石手寺刻板」では衛門三郎の子と石の大きさは同じく八人、一寸八分だが、衛門三郎の遍路回数はみえず、生まれ変わりも「経年月」とされているだけである。もちろんこれらは文章上の単なる省略かもしれないが、そこに何らかの意味があるとすれば、つまり衛門三

郎の遍路回数の有無には遍路者の時代性が反映されていたのであれば、一六世紀後半には多度数巡拝者はまだあまりいなかったとすることができるともされない。

四国遍路多度数巡拝者について述べてきたが、さらにいえば彼らが四国遍路縁起の作成に関わっていた可能性も考えられる。武田和昭氏は縁起の作成者について、弥谷寺や白方周辺に住し、高野山との関係を有する念仏聖を想定されているが、縁起の趣旨が弘法大師への帰依と四国遍路の勧めにあり、また縁起では弘法大師、香川氏、衛門三郎のいずれもが多度数巡拝をしていることからすれば、熱烈な弘法大師信奉者であり、かつ多度数巡拝の実践者である彼らの存在が縁起の内容に反映されていただけでなく、その作成にも関与していたと考えることもできよう。<sup>(26)</sup>

### おわりに

以上、本稿では四国遍路縁起について検討を加えてきたが、第一章で述べたように四国遍路縁起は西国巡礼縁起を下敷きにしたものであった。もちろん、第二章でみたようなオリジナルな部分もないわけではないが、全体的にみれば西国巡礼縁起に比べると四国遍路縁起は独自性に乏しいといえよう。それはなぜだろうか。最後にこの問題について考えてみたい。

先述したように、西国巡礼縁起は冥界に行った徳道上人が閻魔王から三十三の観音霊場の印を与えられて蘇生する前部と、花山上皇がそれらの印を「発見」して巡礼に出る後部の二つからなるが、船田淳一氏によれば、前者の冥土・蘇生譚は修行者の宗教実践のなから生まれたものである。四国遍路と同様中世までの西国巡礼は僧侶や修験者によって行なわれ、札所がある霊山ではきびしい修行がなされた。山中の札所には「祖霊信仰・山中他界観に基づく冥界信仰」を持つところが多く、そうした場所でなされる参籠などの宗教実践においては「地獄の閻魔との対面と現世への蘇生という、冥界と交感する神秘体験が現出」したと想定される。つまり、徳道上人の冥土・蘇生譚は西国巡礼修行者の宗教実践から生まれ、彼らにより伝承されたのである。<sup>(27)</sup>

一方、後半部の花山上皇の西国巡礼創始譚は、花山上皇が悲劇性と神秘性を合わせもつ貴種であったことによる。中世になると花山上皇は陰謀により退位させられた悲劇の王であるとともに、各地の放浪と熊野での修行により法力をもつ神秘的王とみなされるようになった。こうして花山上皇は、漂白する魔王として神話的イメージが増幅し、「苦修練行の実践的な先達たる資格を十二分にそなえていたばかりでなく、しかもその始祖性を神話的に修飾するのに好都合な第一級の貴種でもあった」ことから、西国巡礼の祖として仰がれるようになったのである。<sup>(28)</sup>

このように、西国巡礼縁起は平安時代以来の巡礼者の宗教実践や花山上皇の特異なイメージ形成の中から生まれたのであり、史料上の初見が一五世紀であったとしても、長い時間をかけて徐々に作り上げられていったものと思われる。

一方、四国遍路は、それ自体は平安時代以来の歴史を持つが、八八の札所の成立は新しく、一六世紀末―一七世紀初頃のことであった。したがって、八八の札所を巡るといふ巡礼形式の歴史は浅く、このため四国遍路では独自の縁起を持つことはできなかったのではないだろうか。つまり、一七世紀後半から四国遍路が大衆化し、四国八十八カ所の由来を説く縁起が必要とされるようになるのだが、四国八十八カ所巡礼には西国巡礼のように多くの巡礼者の巡礼実践の積み重ねの中から縁起を生み出すほどの時間的経過がなかった。このため西国巡礼縁起や石手寺の衛門三郎伝説を下敷きにした形では縁起を上げることができなかったのである。

## 註

- (1) 真野俊和「弘法大師の母―あこや御前の伝承と四国霊場縁起―」(同『日本遊行宗教論』吉川弘文館、一九九一年、初出は一九八六年)。  
 (2) 武田和昭『弘法大師空海根本縁起』の内容と成立背景―四国八十八ヶ所辺路成立をめぐる―(同『四国辺路の形成過程』岩田書院、二〇一二年、初出は二〇〇七年)。以下、特に断りのない限り、武田和昭氏の所論に触れる場合はいずれもこれによるものとする。また、史料Bからの引用もこの論文による。

- (3) 武田和昭「説経『苜萱』『高野の巻』と『弘法大師空海根本縁起』―四国辺路との関係―」(『密教美術と歴史文化』法蔵館、二〇一二年)。武田和昭氏は阪口弘之氏蔵本をDに分類されるが、武田和昭氏のいわれるように全体としてはA系なので、ここではAに含めることにする。なお、武田和昭氏によると、これらの史料の写本・版本は一日点余ある。
- (4) 愛媛大学法文学部日本史研究室蔵の『奉納四国辺路之日記』も同じく「元禄元年土州一ノ宮」発行であり、関連性が注目される。
- (5) 高木啓夫「南無弘法大師縁起―弘法大師とその呪術―」、同「弘法大師御伝記―弘法大師とその呪術―」(『講座日本の巡礼第二巻 聖蹟巡礼』雄山閣出版、一九九六年、初出は一九八六年、一九八七年)。
- (6) 喜代吉栄徳「四国辺路御開基弘法大師縁起完」(『四国辺路研究』五、一九九四年)。
- (7) 西国巡礼縁起については、以下の論考を参照した。浅野清編『西国三十三所霊場寺院の総合的研究』(中央公論美術出版、一九九〇年)、恋田知子「『西国巡礼縁起』の構造と展開」(同『仏と女の室町―物語草子論―』笠間書院、二〇〇八年、初出は二〇〇六年)、同「記述される巡礼―西国・熊野の諸相から―」(『説話・伝承学』一七、二〇〇九年)、同「直談と縁起―墮地獄・蘇生の物語―」(『遊楽と信仰の文化学』森話社、二〇一〇年)、同「霊場巡礼の成立と縁起生成―巡礼縁起の形態を端緒として―」(『中世の寺社縁起と参詣』竹林舎、二〇一三年)など。
- なお、恋田知子「『西国巡礼縁起』の構造と展開」の「西国巡礼縁起および関連文献年譜(抄)」に中近世の西国巡礼縁起がまとめられてあり、便利である。
- (8) この他、香川氏が永禄二年に「花の泪を引かへし」と結びを切るとあるが(Cには「はなのたもとを引かへ」とある)、松尾寺蔵『西国霊場縁起』には出家した花山上皇が「花の袂をひるかへし」麻の衣を着たとある。
- (9) Aには遍路をする功德、遍路者に道を教え宿を貸す功德しかみえない。

- (10) Bには「始て辺路を三十三度、中辺路を七度させ給」とある。
- (11) 以下については、白井加寿志『四国遍路の実態』(徳島の研究 第七巻民俗編 清文堂出版、一九八二年)、喜代吉栄徳『四国の辺路石と道守り』(海王舎、一九九一年)、同『へんろ人列伝』(海王舎、一九九五年)、『牟礼町史』(一九九三年)、林勇作『土佐の石造遺品集』(一九九五年)、『四国遍路のあゆみ』(愛媛県生涯学習センター、二〇〇一年)、『土佐国 石塔・石仏巡礼』(高知県立歴史民俗資料館、二〇〇四年)、小松勝記『へんろ道を通る』(毎日新聞高知支局、二〇〇七年)、高知県歴史の道調査報告書第二集『へんろ道』(高知県教育委員会、二〇一〇年)などを参照。
- (12) 三十三度行者については、豊島修『西国巡礼聖の一資料―熊野那智山の三十三所巡礼行者を中心に―』(同『熊野信仰と修験道』名著出版、一九九〇年、初出は一九七九年)、小嶋博巳『行者集団の形成』(『西国巡礼三十三度行者の研究』岩田書院、一九九三年)を参照した。
- (13) 熊野の勸進聖については、豊島修『熊野信仰と勸進聖―中世末期の那智本願―』(『近畿霊山と修験道』名著出版、一九七八)、吉井敏幸『近世初期一山寺院の寺僧集団』(『日本史研究』二六六、一九八四年)、太田直之『中世の社寺と信仰―勸進と勸進聖の時代―』第二編第一章(弘文堂、二〇〇八年)などを参照した。
- (14) 豊島修氏、吉井敏幸氏は三十三度行者が西国巡礼の先達もつとめていたとするが(豊島修註(12)前掲論文、吉井敏幸『西国三十三所の成立と巡礼寺院の庶民化』(浅野清編『西国三十三所霊場寺院の総合的研究』註(7)前掲書)、小嶋博巳氏は三十三度行者の先達機能については否定的である(註(12)前掲論文)。
- (15) 五来重『高野聖』(角川書店、一九六五年)。
- (16) 十穀聖は木食聖ともいい、穀物を断つ行をしている聖のことである。穀断という常人にはなしえない行為により宗教性が高まり、勸進という人々の信仰心に訴え喜捨を請う活動にとって有利に働いた(太田直之註(13)前掲書第二編第四章、第六章)。
- (17) しかし、高野山から聖がいなくなったわけではなく、江戸時代には高野山の組織として学侶方、行人方と並んで聖方が存在し、奥院周辺には近世になっても十穀聖が集まって修行生活を営んでいた(太田直之註(13)前掲書第二編第五章)。
- (18) 次に述べるように、三十三度行者の巡拝回数は三三だが、四国遍路多度教巡拝者のそれは、七、二一、三三とまちまちである。このように巡拝回数に統一性がないことも四国遍路多度教巡拝者には組織的まとまりがなかったことを示しているよう。
- (19) もちろん、真念と四国遍路を同行した洪卓が「高野山奥院護摩堂本樹軒主」(『四国辺路道指南』)であり、また高野山の学僧寂本に『四国遍礼霊場記』の執筆を依頼したように、真念と高野山とは決して無関係ではなかった。また、『四国辺路道指南』と『四国遍礼霊場記』の売り上げを伊予国満願寺の修理料に充てようとしているところに、かつての勸進聖の面影をみることも可能であろう。
- (20) 新城常三『新稿 社寺参詣の社会経済史的研究』四四二頁(塙書房、一九八二年)、豊島修註(12)前掲論文、小嶋博巳註(12)前掲論文。
- (21) 宮崎忍勝『遍路―その心と歴史―』第四章(小学館、一九七四年)、近藤喜博『四国遍路研究』第一部第九章(三弥井書店、一九八二年)、星野英紀『四国遍路と山岳信仰』(大山・石鏡と西国修験道)名著出版、一九七九年)など。
- (22) 先述した(4)(5)(6)のほか、四国遍路関係の石碑・石塔には日付を二日するものが多く、二一という数字は四国遍路にとって特別の数字であった。
- (23) 『四国遍路のあゆみ』(註(11)前掲書)二六九頁以下に多くの多度教巡拝者があげられている。
- (24) 小嶋博巳註(12)前掲論文。
- (25) 『石手寺刻板』などの衛門三郎伝説と四国遍路縁起の衛門三郎伝説の違いについては、拙稿『衛門三郎伝説と熊野信仰』(『四国遍路と世界の巡礼』二、二〇一七年)を参照された。

- (26) もちろん、武田和昭氏のいわれる念仏聖のなかに多度教巡拝者がいた可能性も十分想定される。
- (27) 船田淳一「中世巡礼の精神史―山林修行者と冥界の問題―」（『日本思想史学』四五、二〇一三年）。
- (28) 中村生雄「狂気と好色をめぐる物語―花山上皇の西国巡礼創始譚―」（同『日本の神と王権』法蔵館、一九九四年）。
- (29) 内田九州男「四国八十八カ所の成立時期」（『四国遍路と世界の巡礼』法蔵館、二〇〇七年）。

\*本研究はJSPS科研費JP25284124の助成を受けたものです。